

百鬼夜行の少年

鏡ヶ原遺聞 壺ノ巻

天堂里砂

Risa Tendo

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▢（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▢キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 ひだかなみ
DTP ハンズ・ミケ

目次

妖怪ヶ原と水虎

5

妖怪ヶ原と姫神

127

あとがき

214



妖怪ヶ原と水虎



序章

「ウンなんか、ついてないのに」

秀一は祖父に叩かれた頬を小さな手で押さえた。

じんじんと痺れるように痛む頬は、熱を持っている。まだ幼稚園に通い出したばかりの秀一には、祖父が彼を叩く意味はよく分からなかった。ただ目に映るものを「みえる」と言っただけで、「嘘をつくんじゃない」と叩かれるのだ。

回数を重ねるごとに力が強くなっているような気がする。涙を堪えながら、彼は仏間へ向かった。

そつと襖を開け、広く薄暗い部屋に入る。その部屋の南向きの壁には、額に入れた写真がずらりと並んでいた。どれも堅い表情をしている。秀一が知っている人は、一人しかいなかった。

彼の暮らしている家には、たくさん部屋のあった。秀一にはまだ、時々、どこに目的の部屋があるのか分からなくなるときがある。そんなときは『誰か』が助けてくれるので、さすがに迷子になったことはないが。

母は「めいかのむすめさん」なのだと、誰かが言っていた。秀一の父には「もったいない」のだと。

秀一は父に教えられたとおり、部屋の奥にある仏壇の前に正座をして手を合わせた。黒い扉の仏壇の豪華な金の飾りがきれいだった。ずっと上の方には、雲に乗った人のようなものの細工が並んでいる。仏壇は彼らが棲んでいる、小さな街のように見えた。

秀一はその『街』を視ながら溜息をついた。

「おじーちゃん、ぼくのこと、きらいなのかな？」

一人呟くと、背後にふいに視線を感じた。振り返るとそこには、茶色い服を着て、髪を短く刈り上げた若い男が正座していた。背筋をぴんと伸ばしている姿に近寄りがたさを感じるが、彼の浮かべてい

る笑みはいつでも優しかった。

秀一がここで彼に会うのは初めてではない。

「あれ？ おにいさん、またきてたの？」

男はにこりと笑って、何かを言ったような気がした。けれど口を動かした彼が何を言ったのか、聞こえなかった。

秀一は彼に近づいて、その隣に座る。男の手がそつと頬に触れた。二度ほど撫でて、離れていく。

彼はいつも秀一に優しかった。

「いたいなの、とんでけ、だね」

頬は痛かったが、秀一は笑った。

彼は秀一がここへ来ると、いつもいつの間にかそばにいた。そして優しく笑んで、頭を撫でてくれるのだ。

「おにいさんが、いつもそばにいてくれたらいいのにな」

男が何か言う。

「なあに？」

男はおどけた様子で困ったような顔をした。

「おにいさん、とーめいだね。おばけみたい。でもちがうよね」

秀一は幼稚園で教わったばかりのお化けの歌を歌った。それによると、お化けは目に見えないものらしい。

彼は両腕を持ちあげて——そうかな？ と言うように、自分の身体を見下ろす。どこか滑稽な感じで、秀一は思わず声を立てて笑った。

「あっちがわが、みえてるよ？」

よしよしと、男の大きな手が頭を撫でてくれる。

秀一にとってここは、家の中でどこよりも心安まるところだった。

「ねえ、おにいさん……」

言いかけた秀一は、背後で障子が開いたのに驚いて口をつぐんだ。

そこには父が立っていた。

「秀一？ 何をしてるんだ？」

「あのね、おにいさんとはなしをしてたんだ」

秀一は男に同意を求めて目を向けた。けれどそこには誰もいなかった。

「あれ？ いなくなっちゃった」

父はほんの少し痛みに耐えるように顔をしかめたが、すぐにいつもの表情に戻った。

「またしかられたのか？」

父がかがみ、大きな掌で秀一の頬を撫でる。ついさっきまで部屋にいた男とは違い、温かい感触がちゃんとあった。

「……うん。でもぼく、わるくないもん」

唇を尖らせて立ちあがり、秀一は部屋に飾られている写真を見あげた。

「お父さん、あれはだれ？」

父は秀一の指さす一枚を見つめた。

「あれは、秀一のお祖父さんの叔父さんだよ」

「そうなの？」

「戦争で亡くなったんだ」

「ふうん……」

『戦争』も『亡くなった』も分からなかったが、この部屋が彼の部屋なのだと分かった。

「さあ、戻ろう。早く冷やした方がいいからな」

秀一は父に手を引かれて仏間を出た。

「やっぱりあのひとのへやだったんだ」

ただ、ここが彼の部屋ならば、いつでも会うことができるのだと、嬉しかった。

写真には、先ほど頬を撫でくれた帽子を被った青年の、凛々しい顔があった。

一章

車で買い物に出かけていた父が、反対車線からはみ出してきたダンプカーと衝突し、事故死したのは、秀一が高校一年の夏休みを迎える少し前のことだった。雨によるスリップが原因だと聞いている。

即死だったらしい。事故後の車を見たが、酷い有様だった。よほどの衝撃だったのだろう。

葬儀場へ来たのは初めてだった。もつと哀しみの溢れる場所かと思っていたが、妙に淡々としたことは進んでいった。それは秀一自身があまり哀しみを感じていないからかもしれない。

それよりも案外、葬儀場というところに幽霊はいないものだと、秀一は考えていた。一時的に連れてこられるこの場所に未練を残さないからだろうか。

むしろ人が背後に背負っていることが多い。

ある男の背中には恨めしげな表情をした女性がいる。いかにも恨んで憑いているようだ。

まだ人間らしくない姿の赤ん坊を背負っている若い女性もいた。中絶か、流産か。

中には優しく微笑む老婆を連れている人もいた。それは悪いものではなさそうだ。

どうして自分以外には視えないのだろう。子ども頃はそんなふうに思っていたが、今ではどうして自分にだけ視えるのだろうかと思うようになっていた。

それが普通ではないことを、理解したからだ。

焼香する人々を、秀一はぼんやりとながめていた。次々とやってくるのは、父の会社の同僚と、秀一の高校の関係者だった。

一方、秀一の母方の親族は、斎場の隅にかたまっている。

秀一の両親は、彼が小学校の中学年の頃に離婚し

ていた。それ以降母方の親族に会ったことはなく、母親とも久しぶりに顔を合わせた。彼らはちらちらと秀一を見ては何か言葉を交わしている。

秀一は父の家族のことを知らなかった。母方の親族も知らないのだろう。つまりそれは、彼らの中の誰かが、秀一の面倒をみなくてはならないということだ。多分それを話し合っているのだ。

秀一は意識的に耳を塞いで、彼らの声など聞こえないふりをした。聞こえても、理解できないような顔を。

少し離れたところに座っている母は、うつむき加減にずっと秀一を見ることを避けている。

別にそれでもよかった。

母は秀一の見えないものを視る眼を疎ましく思っていたようだ。そしてそんな眼を持つ息子自身を気味悪がっていた。対する父は、離婚後秀一を引き取ってくれたものの、ただ「視てはいけない」と言っただけで、息子のことに興味などない様子だった。

一緒に暮らしていたはずなのに、秀一に父との思い出はさほどなかった。お互いにある程度の距離を保ち、秀一の眼についてあえて触れないように暮らしていたのだ。

母は息子を引き取ることを拒んだ。まったく傷つかなかったと言えば嘘になる。もしかしたら、久しぶりに会う母は息子に会えたことを喜んでくれるかと、大きくなったと言ってくれるかと、少しだけ期待していた。

けれど母は変わっていないかった。今も怯えたように、秀一から目を逸らしている。彼の記憶にある姿と同じだった。

秀一としては誰かが後見人にさえなってくれば、父の保険金と奨学金、あとはアルバイトでなんとか生活をし、高校を卒業したら働くつもりだった。

これから先のことを考えていた秀一は、目の前に誰かがやってきたのに気づいて視線を上げた。そこにはまだ若い、三十代前半ほどに見える男が立って

いた。少し伸びた髪を落ち着かない様子で撫でついている。

「秀一くんだね？」

「——はい。どなた、ですか？」

声をかけてきた見知らぬ男に、秀一はとっさに身構えた。

人と話すのは、苦手だ。彼らは秀一が不審な態度を取ると、途端に気味悪げな表情になり、距離を置くようになるから。

身構える秀一を見て、優しげな顔立ちの男は、ほっとしたように微笑んだ。きつちりと着込んだ喪服もふくには似合わないほどに温かい笑みだった。

「大きくなったね。それに兄貴によく似てきた」
のんびりとした口調で言われ、秀一はただ戸惑とまどった。

「……あの？」

誰に、何だって？

「ああ、ごめん。僕は美崎久美。みさきひさみきみのお父さんの、

弟だよ」

「え？」

父に兄弟がいるなど聞いたことのなかった秀一は、久美を見あげることしかできなかった。

秀一の姓は橘たちばなだ。父が婿養子むこだったことは知っていた。母と離婚するとき、父は秀一が転校しなくてもいいように計らってくれた。姓が変わることで学校でからかわれることがないように、秀一の姓はそのままにもしてくれた。

それは知っていたが、父は天涯孤独てんがどなのだと思いきんでいた。それくらい、彼は故郷の話をしたことがなかったのだ。当然、秀一は父方の祖父母のことも知らない。

突然叔父だと名乗られても、簡単には信じられなかった。

「……本当ですか？」

「ん？ もしかして何も聞いてない？」

「父は、自分のことを話さない人でしたから」

息子の自分にさえ、何も話してくれなかった。父がどこで生まれて、どう育つてきたのか。秀一は何も教えられていないのだ。

本当に息子のことなどどうでもよかったのだろうと思う。

こんな眼を持つて生まれてしまったのだから、多分、仕方がないのだ。

「そうか。兄貴は本当に忘れたがってたんだな」

久美は独り言のように言くと、鞆かぼんから取り出した手帳の間から写真を取り出した。

「兄貴と僕だよ」

十代半ばの少年と、まだ十歳になるかならないかの少年が写っている。年上のほうはたしかに父だ。

「弟、いたんだ」

「ふたりきりの家族だったんだよ。兄貴がこの……」

久美が写真の中の幼い自分を指さす。

「僕くらいの年の頃に両親を亡くしたんだ。僕にと

ってはずっと兄貴がたった一人の家族だった。でも今は……」

彼はもう一枚の写真を差し出す。

「見て。こっちは、僕ときみ」

はたち

二十前後の若者が、二歳ほどの少年を抱きあげている。それは間違いなく秀一だった。じつとレンズを――多分父を見つめて無邪気に笑っている。

「俺……親父の生まれた家に行ったこと、あったんですか？」

「うん。話もしたよ。覚えてないよね、小さかったし」

「ええ……」

そんなふうに笑えた頃もあったのだ。そのときのことを覚えていないことが、少し惜しいような気がした。きっと父も、写真の中の青年のように秀一を抱いてくれていたはずだ。そのとき父が、どんな表情を浮かべていたのか、見てみたかった。

過去のことをとやかく言ったところで、どうしよ

うもないが。

「兄貴はある日突然家を出て、ずっと戻ってこなかったんだ。だから、言いづらかったのかもしれないね」

「……違うよ」

秀一は小さく呟いて、母へ目を向けた。父は母とそんな話をするような仲に見えなかった。

夫婦だったのに、変な話だが。

きつと彼女も、久美のことを知らないだろう。

「ああ、あの人が義姉ねえさんかい？ 挨拶あいさつに行かないと」

「まって！……ください」

母へ足を踏み出そうとした叔父を、秀一は慌てて止めた。

「秀一くん？」

「母はもう関係ないんです。もう何年も前に離婚していて……だから、そつとしておいてください」

実際は母方の親戚から漏れ聞こえる声が恥ずかし

いだけだった。今もこちらを見てひそひそと話す声が聞こえていた。

——なんだ、正美まさよしさんには弟がいたのか？

——もつと早く来ればいいものを、何をしに来たんだ？ 向こうが葬式をあげるのが筋じゃないか。

保険金目当てじゃないの？ と、叔母おばの声も届いた。噂話うわさばなしや悪口ならば、もつと小さな声ですればいいのに。

居心地悪い気分で、秀一は立ちあがると、久美を斎場から引つ張り出す。

「久美さん」

「叔父さんと呼んでよ。あ、その顔は、何しに来たんだって思ってるんだろう？」

はつとして秀一はうつむいた。とつさに否定できなかった。思わず口ごもる。

「その……」

「仕方がないよ。急なんだから。ね？」

「……父のことは、誰から聞いたんですか？」

「死亡事故はテレビで名前も出るだろう？ 田舎は

みんな家族のようなものだから、何かあれば誰かが教えてくれる。まだ疑ってる？」

「そういう世の中ですか？」

秀一の面倒を誰がみることになるのかと話し合っている親類の声が聞こえてくるだけに、わざわざ近付いてきた久美のことが怪しく思える。父が家族のことを話してくれていたらこんなことにはならなかっただろう。

「分かったよ。戸籍謄本こせきとうほんをもらってくる。それでどう？ どちらにしろ、必要だろう？」

「遺産のために？」

「きみが遺産を相続するためにね」

困ったように笑った久美に、意地が悪過ぎたかと、秀一はちらりと思った。けれど久美は氣にした様子もなく続ける。

「今回の保険金がいっぺん出ると、就職するまでは暮らしていけるだろ？ あときみに必要なのは、

後見人と、いざというときに頼れる家族だよ」

「家族なんて……」

「ねえ、秀一くん。もし、よかったらどううちの田舎へ来ないかい？ 夏休みの間だけでもさ。こっちで一人で過ごすよりも、楽しいよ。まあ、虫捕りをする年でもないだろうけど」

突然の提案に、秀一は驚いた。

「――叔父さんの家で？」

「そうそう。僕も一人暮らしでね、部屋が空いてるんだ」

久美は秀一を残し、彼から言えば元義姉にあたる秀一の母のいるほうへと歩き出した。今度は秀一も止めなかった。

秀一は自分が彼のことをさりと「叔父」と呼んだことに気づいた。不思議な男だった。怪しいのに、怪しめないのは、優しい笑顔と、どこか間の抜けたようなのんびりとした語り口のせいだろうか。

彼は秀一に無関心で冷たく感じていた父とどこも

似ていない。けれど身に纏^{まと}う雰囲気^まが、父を思い出させた。少なくとも、まったくの他人ではないと思えるほどには似ている。

久美と母方の親類たちは軽くもめた後、斎場から出て行った。

彼と暮らすのは、どんな感じなのだろうか。叔父とはいえ、ほとんど見知らぬ他人だ。考え込んでいると声をかけられた。

「橘、大丈夫か？」

担任教師だった。

「はい」

「困ったことがあつたらいつでも相談しろ。人生にはいろいろある。くじけるなよ」

「……はい」

秀一が頷くと、彼はぽんと肩を叩いて帰って行った。

「いろいろ、か……」

秀一は久美たちの出て行った扉へ目を向けた。叔

父が戻ってきたら、夏休みの予定を伝えるために。

久美の家で暮らすことに決めた秀一は、夏休みを前にして鏡ヶ原^{かがみ}という町へ鞆一つで越すことになった。

秀一はバスの車窓を流れる緑の畑を見るときもなしに見ながら、葬儀からこれまでのことを思い出していた。

久美は式が終わると、秀一のためにさまざまな手続きをしてくれた。その過程で、秀一は久美がたしかに父の弟であることを知ったのだ。

父と暮らしていたマンションの部屋は引き払ってきた。必要なものだけ取り出して、あとは業者に任せてもよかったのだが、秀一は父の遺品と自分の不要品を整理した。一緒に気持ちも整理したかったのかもしれない。

それから、しなくてもよいのに、床を拭き、窓を

拭き、壁まで拭いた。

家具が運ばれていき、汚れさえもなくなった床に寝ころんだ。そうして、がらんと広くなった、もはや思い出も生活の匂いさえない部屋に別れを告げた。そして今、がたがたと激しく揺れるバスに乗って、聞いたこともなかった名前の町へ向かっている。

まさかそこが、『こだま』しか停まらない新幹線の駅からローカル線乗り継いで二時間十分、バスで四十分、バス停から歩いてさらに四十分の本当に、ドのつく田舎だとは思ってもいなかった。引越しの日を決めたとき、久美は前もってそれを教えてくれた。けれど秀一の想像より、はるかに田舎だった。しかし、引き返そうにも帰る場所はない。

父の死をきっかけにして、新しい町で、新しい生活を始める。そう心に決めてやってきたのだ。

どんだん山奥へ入っていったバスは、民家がまばらにある町の、畑の真ん中にあるバス停に停まった。降車した秀一は、広々とした畑道にぼつんと一人

取り残された。周囲の山々から、蟬せみの声がわんわんと響いてくる。

秀一は一日四本しか時間の書かれていない時刻表の前にしばし立ちつくした。田舎だ。

『首無し地蔵』というバス停の名のとおり、そこには首のない六地蔵が並んでいた。普通の人にならば、ただの奇妙な地蔵に見えるだろう。しかし秀一には地蔵がそこにあるはずのない首を、あるはずのない手で胸に抱えているのが視えた。しかも薄ら笑いを浮かべている。

幼い頃、人ではないものの姿は透けて視えていた。それなのに、年を重ねることにはつきりと視えるようになり、今ではそれに影があるかないかでしか、人間と幽霊を見分けることができないほどだ。

「……………どうも」

思わず地蔵に挨拶をしてしまい、秀一は額を押さえた。できるだけ普通の人間のように振る舞おうとしているのだが、ときどきこうして声をかけてしま

う。

彼らは秀一にとって気安いものだった。

秀一が彼らを目で追うと、見えない人々は怪訝な顔をした。ときには気味悪そうな表情を浮かべる。けれど幽霊や妖怪といったものたちは、秀一が視ても驚きこそすれ、気味悪がったりはしない。

母の実家に暮らしていた頃、可愛がつてくれた幽霊の影響もあるのだろう。秀一にとって彼らは、恐ろしいものではなかった。

しかしバス停名の下に記された鏡ヶ原という地名が、鉛筆の落書きで小さく妖怪ヶ原と訂正されているのは気になる。地元の子どもの悪戯だろうが。

秀一は気を取り直して久美にもらった手書きの地図を広げた。カレンダーを切った裏紙に描かれたそれは至極単純だった。

バス停を背にして農業用水路沿いを歩いていき、川に合流したら堤防沿いを歩き、二つ目の橋を渡ってさらに進み、山裾に沿ってゆるくカーブを描く道

を行く。

『小さな祠』で右折した先に家の絵が描いてある。

矢印で指し示し、『ここだよ』と書いた隣には、可愛らしい蜥蜴だか井守だか守宮の絵が描いてあった。この田舎ならば、どれがいても不思議ではない。

迷えば電話をすればいいだろうと思い、携帯電話を取り出してみると、見事に圏外だった。

「ここは日本か？」

親しい友人もいないし、これは携帯電話も節約のために解約すべきだろう。

道沿いに立つ家々は、街中では考えられないほどの距離を置いて点々と並んでいる。昭和の初期を思わせる古い家もあれば、まだ最近建てたばかりと思われるものもあった。

途中で子どもたちが川で魚か何かを捕っているのを見かけた。はじけるような笑い声が聞こえてくる。のどかな光景だ。

幸いにも迷うことなく、秀一は無事叔父の家にた

どりで着いた。立派な門の向こうに、久美が見せてくれた写真に写っていた古い二階建ての家がある。一階と二階の屋根の間に狭いのが、古めかしい印象だ。十数年前、記憶に欠片も残ってはいないが、自分は父に連れられて、ここへ来ているらしい。

どうして父は、一度も故郷の話をしてくれなかったのだろうか。息子を連れて訪ねるくらいだったのだから、久美と折り合いが悪かったわけではなさそうなのだが。

そこまで考えて、やめた。今更父のことを思い出したところで、どうなるものでもない。

門をくぐり、とても手入れがされているとは思えない庭を抜け、秀一は玄関先に立った。呼び鈴を鳴らすと、ぼさぼさの頭をし、絵の具で汚れたＴシャツとジーンズ姿の久美が笑顔で出迎えてくれた。喪服とまったく印象が違い、一瞬別人かと思った。

しかも玄関の土間には、ところ狭しとカンバスが立てかけられ、イーゼルが転がっていた。鼻につく

匂いは、多分油絵の具だ。

目を瞬かせた秀一のことなど気にもかけず、久美はにこやかに言った。

「いらつしゃい、秀一くん」

「……どうも」

いつもの条件反射で、とっさの挨拶に詰まり、小さな声で応じる。

「今日からよろしくね」

「……よろしくお願いします」

これから世話になる叔父とお決まりの挨拶を交わした秀一は、ふと視界の隅に入った鮮やかな緑に目を向けた。

広い玄関の土間の下駄箱の上に、郵便物と古雑誌がうずたかく積まれている。そのさらに上にさりげなく奴風の折り紙が置かれていた。

「奴風……」

秀一の父も、よく奴風を折っていた。ちゃんと袴も作って人形にしたものだ。

玄関に置かれた奴唄は、よく色を変えた。作っているのが父だということ以外、意味も知らない。どうやら故郷に関わりのあることだったようだ。

母はその奴唄を「気味が悪い」と言っていた。それからしばらくの間、折り紙を玄関で見ることがなくなつたが、ある日下駄箱の中に見つけたことがあった。

この折り紙を見ると、秀一のことを気味悪がつた母の怯えた眼差しを思い出し、胸の奥がきしりと音を立てて痛んだ。

父の葬式のときでさえ、秀一と目を合わせようとしなかった母に会うことは、きつともうない。

「ああ、それ？ お守りなんだよ」

「お守り？」

「そう。子どものお守り」

さらりと答え、久美は「暑いねえ」と言いながら、さつさと奥へ歩いていく。

『子どものお守り』だったら、父は、自分のために

折ってくれていたのだろうか。

あの、無関心だった父が？

考え込みそうになった秀一は、久美が彼を置いて部屋に入つていったのを慌てて追つた。

「その辺に座つて。暑かつただろ？ お茶を持ってくるよ」

秀一は案内された茶の間の敷居の前で足を止めた。玄関の謎のキャンバスやイーゼルを見たときから、分かつていたが……。

秀一は「座つて」と言われた室内を見渡した。

おそらくは畳の部屋なのだろうが、どこにも畳らしきものは見えなかった。

まず目に入るのは絵の具のついたボロ布やカビの生えたパレット、何やら描かれているスケッチブックやカンバスだ。

それから山と積まれた雑誌やアルバムの上に、吸い殻が山盛りになった灰皿。無論、溢れ落ちた灰が辺りに散らばっている。うっかり油絵の具を溶くシ

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。